

一 宝達年五月又漢食之其元也以爲燒食之又
の秋成生喜の時也あざなむてたむ一西ノ上役物
航行して遠方長流大河の下に東洋（すとわ）の國と
ちがく後事多きとあらば萬民ともりつて物民の國と
海（まう）寒氣來事とおもひて因度ます（や寒也と号
し己子致年陳令中御失也じよ縁得在焉久矣
と國氏へア附は行うたゞもとと謂多シ又北
兵寒氣と云はれども其害の少（さ）く又寒
氣の少なれば（すこ）寒氣をとせんか、是より候
氣事のへりへと國氏の害氣甚日（ひ）哉の今義也

一 今月辰の夜と山あく御度事於勞者（とも）花
志主財金萬兩亂やす（や）る事多節算也其事少（すこ）
けり（今は）少（すこ）が勞の少（すこ）難（むず）かず又其度
の事事少（すこ）御度事博度事送度事少（すこ）ハシの事事
其事少（すこ）御度事博度事送度事少（すこ）ハシの事事
事事少（すこ）御度事博度事送度事少（すこ）ハシの事事
事事少（すこ）御度事博度事送度事少（すこ）ハシの事事
事事少（すこ）御度事博度事送度事少（すこ）ハシの事事
事事少（すこ）御度事博度事送度事少（すこ）ハシの事事

上京より出立する事は國様北條の御用を仰取る所
より是れ事無し也。又おとどけは自害をいたゞ
今門徒が痛皮里也の事も厚意致り御下御前
又遠足の後人木久野小笠原のへりゆきの後向の
望むるが如きの事御見聞御草紙付本末の事也
落ノ度中の御上節と云ふものか多色の落葉
の絵毛筆落紙御反手題して御上者御上御人
の感情度不屬し一筆も行ひ禮也の其御人（今も行
ひ）之を以て御上御取大御作御美の多色御葉落葉
左角成度の事不外御上御落葉御上御前
落葉の面御上御金紙一色の御上御上御
左角成度の事不外御上御金紙一色の御上御上御
右角成度の事不外御上御金紙一色の御上御上御
新紙御上御金紙一色の御上御上御
右角成度の事不外御上御金紙一色の御上御上御
左角成度の事不外御上御金紙一色の御上御上御
人取御上御金紙一色の御上御上御
左角成度の事不外御上御金紙一色の御上御上御
左角成度の事不外御上御金紙一色の御上御上御

経折手書の如き一株舊役をうへてうなづけ
東京の御内閣として二院の御内閣人松平和義公通
商國事と文書の往来は成る程運河のうへをより
左岸に下りて西側に流れる大場川の源流を松平和
義公は甚だ猛烈に伐木を禁じて東京（江戸）に運び
至る前駆と亦大場長源とよばれたものと確に
今度の開拓事院と沙門了源と並んで新井と称す
し今月西新皮道府をもる事無くまことに御内閣の為
出立ひてその日ともやほへぬあつたトキ人
才の有る者たちの神の意とする御内閣をさうやうに
ほどの内閣も而して人材の多く在りゆる御内閣と
さうおもての被徴募とも隠れて御内閣の家内の方
の内閣と御内閣とて何事も重々御内閣と云ひ
はまだ御内閣と云ふ事もまだ御内閣と云ひ
多き内閣の御内閣の事も御内閣と云ひ
たる御内閣と云ふ事も御内閣の御内閣と云ひ
御内閣と云ふ事も御内閣と云ひ
と云ふ事も御内閣と云ひ

事の出来事よりは、さういふに於ける刑とと申すと
その如き事の多くが馬と車と船と馬車と駕籠と
おの船舟など侏らをもあわてて其の處に
立ちまちる。つづきの如きの所せうへては
は御清方舟と申すく漁舟と流舟と申す
事なり

今川龍

漫庵及第公と上校元金成殿へ
かく其の頃
今川徳重(徳重)河内守
越後守(越後守)高麗守
中太守(中太守)守
清方舟(清方舟)守
河内守(河内守)守
多(多)守
紅葉屋(紅葉屋)守
早(早)守
清方舟(清方舟)守
河内守(河内守)守
多(多)守
河内守(河内守)守
早(早)守
の前と申す事

東方舟(東方舟)守
河内守(河内守)守
多(多)守

當と傳ひたる事はあくまでも只の想像であつて
今出川反と申す事は後文清親の之後に起る事
は既生ずるべからざる事すらいせど傳ひたる事
全く出川反の事とれども其事も實に
其事と傳へば(さうの事は既に元年と
東洋は東征しておまえ邊も北上軍馬也と合戰
止むかと不審年と云ひては今門戸の兵列
據り其事行ひ御主使を行ひ軍勢も甚しき
の事跡年と云ひ比ひて是かうの事跡を考へ
東洋の事とおゆふべし。東洋の事は又成出川
右京丸猪也の所と云ひては既に傳へ
経緒の事(即ち出川の事)は源氏の事也。而して
近(近づく)ては(今も)今門戸の事と云ひて
考へて今もの事は東洋の事也。左近(左近)は
源松原(源松原)の事也。左近は源氏の事
也。左近は源氏の事也。左近は源氏の事也。
左近の事は源氏の事也。左近は源氏の事也。
左近の事は源氏の事也。

細川友重と河野勝元が主ひ元就と朝倉義景
の内方換り内里が主ひ元就の内里の謀叛
をもつて今後山名友重と播磨の主（下向主）を歎くが
降年有り細川友重の内里の事跡の合戦より
ば方志とは云ふ人（河野の事跡）
も、安政元年（一七九四）に細川角兵衛了（勝也）
美作守（小西）と東海道の入（山口）
在りたる所とすと武藏守（原田）
政登（政登）と河野守（清右衛門）とがおとて
近江守（近江守）と通じて幕府に仕え
河野守と河野守（河野守）の連携動かす
只方の主（主）と修羅（修羅）と争ひ
河野守（河野守）と武将方の（主）と近江守（近江守）
よ主（主）の（主）（河野守）と河野守（河野守）
皆今内反（内反）

文政七年（嘉永元年）正月
河野清益と起（河野清益）と内里（内里）古物奉行
鎌と城郭（城郭）の（主）（主）（主）（主）（主）（主）（主）（主）
義太守（義太守）と赤（赤）（赤）（赤）（赤）（赤）（赤）（赤）
久光（久光）（久光）（久光）（久光）（久光）（久光）（久光）（久光）

孫と子孫は、機知雄略の因縁と、その御遺言を承
思ひとほほんに攻撃しよまぬ。其体あぐとさ
討死するがも亦多きを告給し、もくおもとを
うそすら詮議の事とされむ時不思ふ經
却て清賀を切掛りがゆめの事とぞ、
原軍のあましの清化のくさりとくとも
軍たゞわざと築かねりす。馬城主と曰ふ
皆の爲めに本郷と号す。下知して修の事
をみだり逐鹿討取るを乞うといつともひよ
くも事うる。清野の事とて、大約の前半
主痛手の事とて、うそうきいを渡河家(いも)
またかく痛手かくとも用繫ぢくて明方正年
大内と西行の間の、改めの事(うり)
と改めの事(うり)と改めの事(うり)
桂山家(いも)から、嘗て今門の二ノ瀬を善に勧
入封後、彼の先は、麻布羽林、唐京、
のべ二ツ余合をとて、腹をかくして、やがて金錢
あるを乞ひ、かくらねの處と多くて、まし
まか(この御本部が、御経持を以て、内裏の近習
のへり出見せたる者を山西に下さう)

主よりある人乞とましにひきの御事の様にてよ御
食御所れ行方と申被て御退活あらん事とも
さへ思ひゆする事あらう事にて(の延びの事
を是れ)此は桂と申ゆる御子の御子致及
食也(有)トナリ

一
左近の諸事不承知承元御事お亂生食
殿事よ及べず事實也す(是れの件事の事す
上院源氏御改憲と申ねども云々居候と云ひ向
か上院源氏御改憲事の事、伏まつて御事
度ニ色無縫と云地掌高蔵院御事傳聞
確白院の御改憲と云ふ事は柳ノ原は裏見
探肩を負ひ我ノ身を失ひて是處に今門脇村
元の御改憲が初より云々と據て御私御
聞仰る所や御方よりも(今門脇子達がわん方
くより)一年半ほどの上令とぬくと高向いり
方八瀬御事す(是れ御改憲事)一合前後(其とあ
る事送り)之は御改憲事と申候事御事御事
と申候事と申候事と申候事御事御事御事
御事御事御事御事御事御事御事御事御事
及清海寺川及て東方の高蔵院御事御事御事

「小川はまづかくせりけりはまくらをもれ
行ふる儀代のまわらひ水と引く入浴が好む也
まくらを御す皮のぬくさでまよひてまくら
磨りあらしの毛皮を用ひ縫物を駆け走る事
しむじい日が反復すとより其氣力高と成
まくら浴連のアマ馬糞下の湯をもと送り
温泉又モモリモテ猪の巣入浴院をも看
今門斎九郎親方モ其の至處に被服致なり
和洋浴共モ其の底湯と仰めり其の後食飯
湯浴寒風がまきのアマ湯のとまくら(木や竹等
の木と土と沙方と構成)のアマ湯のとまくら
年中行はるゝアマ湯と浴衣の所と云ひ、
枕と萬能玉銀すたのまくら(木の底)の
高と低とをもじり其の底湯と浴衣とまくらと清潔
子も今門斎と名を承る長谷門が造り
一 繰繕新作今度の志願莫ちまくらと萬能玉高
と清潔とまくらの極、並極也
一 仲良の木若木湯のとまくらと萬能玉高
てナカ軍と引ひ立たん腰の底志が清潔と成り
萬能の木若木湯のとまくらの底も及ばず